

令和4年6月18日(土)

信濃教育会 研究発表会 東北信 A (千曲市立東小学校)

佐伯胖所長 開会の挨拶

おはようございます。本日は、第74期研究員の第1回目の発表会であります。コロナ禍の中で、東小学校の方で開催を引き受けていただきまして、本当に感謝しております。また、開催にあたりましては、関係者の方々が大変ご尽力いただいたことを、これも本当に感謝しております。開催にあたりまして、私が日頃気になってることについて、ちょっとお話ししたいと思います。

それは「能力」という言葉なんです。「思考力」「判断力」「表現力」とか、あるいは「コミュニケーション力」とかいうようなことが、文部科学省は「育むべき能力」として大切だとされております。最近では、今まで能力としては捉えられていなかったような「自己肯定感」とか「好奇心」とか、「自立心」、「共感性」というものも、「非認知能力」という、やはり能力の一種であるとされ、従来の「学力」あるいは「知能」「IQ」のような「認知能力」とは異なる能力、「非認知能力」という能力だと言われて、それが大切であり、それを育むことが教育にとって大切であると言われてます。

しかしそういうふうに、いろいろなものが全部「能力」だからそれらを育めといわれても、一体どうしていいのかわからない現場は非常に困ってしまうわけですね。私もそういう、なんでも望ましいことは全部能力なんだ、というふうに捉えることに対しては、ちょっと困ったな、というような感じをもっておりましたが、きっちりそれを批判するという切り口がどこにあるのかわからないということがよく分からなかったんですけれども、実は私の東大時代の教え子で青山学院大学の教授の鈴木宏昭さんという方が、最近、『私たちはどう学んでいるのか』という筑摩書房からの本を出版しまして、その「第1章 能力という虚構」を読んだ時に「ああ、これはやられたなあ」というふうにショックを受けました。

鈴木さんはですね、「能力というのは『abduction』だ」と言うんですね。「abduction」というのはですね、何らかの結果を説明する時に、それを生み出す原因を想定しているということですね。結果から原因を想定するという論なんです。これが原因から結果を科学的に論証する推論と違って、結果をうまく説明するための、いわば勝手に想定する仮説に過ぎない、——何かそういったことを説明するのに都合の良いということに使われることですね。これは鈴木さんの説明によりますと、例えば比喩で説明する、物の例えで説明するのと同じようなものだというのです。ですから、結果から、その結果を説明する時に、分かりやすいというか都合がいいというか、話しやすいということによって想定しているものが能力というものだ、というわけですね。ですからそれが存在するとかそういったものがあるというよりも、説明上そういうふうに言うのが話しやすい、という所で使っている言葉だということですね。

このことは、別にそれほど新しいことではなくて、ギルバート・ライルという人が『心の概念』(坂本百大ほか訳みすず書房、1987年)という本で、心の働き、特に「知的である」ということの説明を、「何か心なるものが存在していて、その働きで『知的である』ということが生まれてい

る」いう説明は「機械の中の幽霊」を想定するようなもので、それはおかしい、と言うんですね。人が知的であるというのは、ライルに言わせると「disposition」と言うんです。これは翻訳本では「傾向性」という訳語になっていますが、村上陽一郎さんは、「disposition」を、「潜性」、潜んでいる性質ですね、「潜性」と言っています。それは例えば、お砂糖は舐めれば甘い、水に入ると溶ける、これはお砂糖の「潜性」つまり、潜んでいるけれども、様々な状況や場合に応じてその都度立ち現れるもの、これが「disposition」「潜性」なんですね。ライルは、心というものを、何か心という「もの」があるかのように説明すること自身がおかしい、それは機械の中の幽霊を想定するようなものである、という言い方をして、様々な状況や様々な関係の中で多様に立ち現れてくる特性が「知的であること」なんだと言ったんです。これは、まさに鈴木さんが言う、「能力はアブダクションだ」と言って、アブダクションという、結果をうまく説明する時に一応想定してみるのがあるんじゃないか、ということで私たちが作っていることであって、本当にそういうものがあるってわけじゃないですね。

これは1980年代からの認知科学、認知心理学が何度も何度も様々な実験で示していることなんです。MITの物理学の学生でも、「慣性の法則」という物理学の基本的な法則を全然分かっていない、ということ、たまたまあるゲームの説明をしようとする時に出てきちゃったり、あるいは物体の動きの予測を使ったりするわけですね。あるいは、非常に複雑と思われるような算数の問題も、子ども達が親しんでいるできごとの中で使うと何でもなく解けちゃったり、あるいは逆にかなり簡単な論理的推論でも、話の持ち出し方によって大学生でも全然できないということがあるんですね。

経済学で行動経済学という新しい分野が生まれたのは、経済理論に基づいた行動を、人はやらない、理論的に言うとそうする方がはるかに得だと思われるようなことを、人はやらないんだ、それは人々が、どういったことが便利か、どういったことが得かについて、「分かりやすい論理（ヒューリスティックス heuristics）で考えていること、経済理論には全然当てはまっていないことを平気でやっているんだ」というわけですね。経済理論は経済理論であるんだけど、人は必ずしもそういったことをしてないんだって、そういうことを言い始めてから新しい学問分野として行動経済学という学問分野は生まれているんですね。そういう風に、論理的思考力とか、あるいは正しく考える力がどこかに「ある」というわけじゃない。表現力もそうなんですね。表現と言うのは、させようさせようとはたらきかけて出てくるものじゃないんですよ。昨日の朝、NHKで、ジミー大西さんという人が、どういうふうにして画家になったかという話をしていました。明石家さんまさんがですね、「お前の絵は面白いな」と言ってくれたことがショックで、それで目覚めたとかってね。その後さんまさんが番組に出させてくれて、色々な人（たとえば岡本太郎さん）がですね、めっちゃめっちゃほめてくれた。そういったことから、人がちょっと思いつかないようなことをどんどんやり始めたっていうんですね。表現力って、そんなもんなんですよ。

それがさっき言った「潜性」なんですね。どういったことをやるのがなんか良さそうかなとか、面白そうだなとか、あっそれなら分かるなっていうようなことを、多様な場面で子ども達はみんな考えてるわけです。だけどそのチャンスを潰してるっていうことの方が、むしろ実態なんです。ですから能力というのは、「育みましょう」じゃなくて、「それがなくなっているのはなぜか」って

ということの方が、私たちが考えるべきことですね。それは、能力を育てようと思うことじゃなくて、もっと「面白いよ」とかもっといろんな時に「ああそう考えるのが、なんか便利だ」とか、「良さそうだなあ」という、その考えてみたくなる状況ということの中で、結果的に「能力なるもの」表れ出ている、あるいは表れ出ていないということの方が大切で、むしろ一体何がそういうものを押さえつけていたのかなということを考える、それが「能力」を考えることなんですね。決して「育むためにはどうしたらいいかを考えること」ではなくて、それを出なくしているのは何なんだろうかなーって考える方がよっぽど大事なんですよ。

本日は研究員の皆さんの発表をお聞きになって、「能力という亡霊」とらわれている考え方からいかに脱して、そうじゃなくて子どもが生き生きとものを考え、あるいは様々なことをやってみたくなる、そういう事態を作って結果的に能力が表れているっていう事態がいかに生み出されているかを、ぜひ味わっていただきたいと思います。今日は一日どうぞよろしくお願いします。